『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』と宇陀市

65

本居　宣長（もとおり　のりなが）

『江戸時代中期の国学者・賀茂真淵（かものまぶち）は、『万葉集』などの古典研究を行い、古代日本人の精神を研究しました。以前、『万葉集』巻一・四十八の歌（**東野炎立所見而反見為者月西渡**）が賀茂真淵らの研究によって、「**東（ひむかし）の野に炎（かぎろひ）の立つ見えてかへりみすれば月傾（つきかたぶ）きぬ**」と訓が定まったことをご紹介しました。

この賀茂真淵の門下生のひとりに本居宣長（享保十五年・一七三〇～享和元年・一八〇一）がいました。

宣長は、現在の三重県松阪市出身で、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』、平安文学などの研究を行い、多くの書物を著しました。自宅の「鈴屋（すずのや）」では、門人を集めて講義を行いました。なお、この自宅は、松阪城内に移築され、現在は「国特別史跡 本居宣長旧宅」として公開されています。

代表的な書物のひとつに『古事記伝』があります。当時、十分に解読できていなかった『古事記』の解読に成功し、この書物を著しました。『古事記伝』の執筆は、明和元年（一七六四）に始まり、寛政十年（一七九八）にようやく終えることができました。版本としての刊行は、寛政二年（一七九〇）から文政五年（一八二二）にかけて行われました。

このように長い年月をかけて完成した『古事記伝』は、『古事記』の註釈書というだけではなく、のちの古代文学や古代史の研究にも大きな影響を与えています。現在の『古事記』の註釈書は、基本的には宣長の採用した読み・解釈にその後の研究による訂正を加えたものが主流となっているといっても過言ではありません。

宣長は、各地を旅しました。明和九年（一七七二）には、宇陀の地を歩いています。

本居宣長旧宅

文・柳澤一宏（文化財課）

人権コーナー

「最善の手」って、どんな手？

将棋の藤井聡太４段が、29連勝と、新記録を達成しました。

将棋の世界では、お互いが何十手も先まで、読みあい、そのせめぎあいの中で、相手の最も嫌がる手を指すことができれば、それが妙手となり、勝利につながることもあります。

プロ棋士は日夜、将棋のいろいろな場面を想定して、指し方を研究していますが、藤井４段に限らず、人工知能（ＡＩ）が考える「最善の手」を参考に指し方の研究をする若手棋士が、最近、増えているそうです。

将棋の世界は、勝負の世界だからこれでいいのかもしれませんが、さまざまな人が交流する現実の社会では、相手の嫌がることをすると、トラブルにつながることがあります。

日本には昔から「我が身をつねって人の痛さを知れ」ということわざがあり、自分の体を強くつねれば、痛いと感じるように、他人も同じように痛くてつらいのだから、してはいけないと、トラブルの原因を作らないよう戒めています。

ただ残念ながら、つねられてみないとその痛みが想像できないこともあります。価値観の違いから、意図的に相手の嫌がることをしたつもりがなくてもトラブルになるケースもあります。

それでも、相手に思いやりの心をもって接すれば、納得はしてもらえなくても、自分のことを理解しようと努力してくれたという気持ちが、相手に伝わります。

将棋のように人工知能の手を借りずとも、自らの発言や行動について、過去のトラブルの原因を参考にして「最善の手」を考える、相手を打ち負かすのではなく、お互いに相手を大切にし、気持ちを伝え合うことで、トラブルの多くは避けることができます。実際の生活の中で、あなたにとって「最善の手」がどんなことか、いっしょに考えてみませんか。